管弦楽曲での弦楽器の実用的な弓の使い方について　その二

川越　守

On practical Bowing in Orchestra work　II

KAWAGOE Mamoru

Abstract: This is a report that I wrote about using a bow for strings section in Orchestra,through the works of Beethoven and Smetana. I think these bowing is very useful for perfomance of these Orchestral works.

note example

Beethoven　Symphony No.2　D major Op.36

Smetana　Overture　The Bartered Bride

まえがき

1、今回は、以前に書いた北海道文教大学論集 No. 9.　2008. のレポートの補充として、この報告書を書いた。

2、プロ、アマを問わず、オーケストラの演奏には、弦楽器群のための運弓法（⊓∨ détaché spiccato secco etc.）がそれぞれのパート譜に明示されていなければならない。各国のどのオーケストラの場合も、それは皆同じである。印刷されたスコアに書かれたスラーのままで演奏できるものは、意外に少ないのである。管楽器の場合は特に問題はない。舌のつき方は容易なのである。弦の場合は、結局、楽譜に手をいれることになる。

3、我国では、明治 15 年 1 月 19 日付けで、文部省の音楽取調掛、伊沢修二が時の文部卿福岡孝弟に事務大要として提出したものがあるが、その中に「一般的に音楽の高等なるものといえば、管弦楽以上のものはない」と書いている。

4、西洋では、19 世紀を通して多くの作曲家達が、この管弦楽曲を書き、それらは、印刷されて世に出まわっていたのである。我国では、この高等なるものを明治に取り入れようとした。それから大正、昭和と時がたち、今日、先人達の苦労が実って、今や、オーケストラはかなりな数にのぼり、我国に存在している。各オーケストラは、当然、それなりに Bowing を工夫して、管弦楽曲の演奏に当っているはずである。

5、私は、現在も、このオーケストラを「高等」なものとして、アマチュアではあるがそれなりに携わっている。コンダクターとして、又、弦楽器奏者（Violino, Viola、V.Cello, C.basso）としての経験をもって、いろいろな管弦楽曲の演奏の度に、弦楽器群の鳴りの良さを求めて、独自の Bowing をつけてやって来た。奏者が演奏さえ出来ればということではなく、私自身がその Bowing で指揮をしているということでのものであり、これなしに、「私の指揮」も成立しないのである。要するに、

北海道文教大学短期大学部幼児保育学科

「鳴りのよい弦楽器群」をもったオーケストラを自分のものにしたいという考え方である。

6、今回取り扱う楽曲は、ベートーヴェンの「第2交響曲」とスメタナの「売られた花嫁」序曲である。ベートーヴェンの方は今日、あまり演奏されていないうに思うし、スメタナのものは、速度がすこぶる速くて、アマチュアの手にあまるというものである。要するに、どちらもむずかしいものだが、これらはやはり、西洋音楽史上、貴重な管弦楽曲で、一度は演奏してみるべきものであろう。

7、譜例は、スコアを直接にコピーしたものを明示したが、版元の「音楽之友社」からの許可をとったものである。とにかく、ベートーヴェンの「スコア」などは、まず、そのままで弦楽器は演奏出来ない。今回は、バイオリンをピックアップしたのではなく、他のパートにも Bowing の記号を付けた。又、演奏法などの説明も加えた。

8、近代、現代の作品も取り上げたいのだが、版権の問題があって、これらのものに、この手のことを書いて発表することはむずかしい。今回のレポートで、この表題によるものは、一応終了する。

note example

1、L. van. Beethoven　Symphony No.2　Dmajor Op.36

2、Bedrich Smetana　OVERTURE　THE BARTERED BRIDE

「印刷されたスコアの表題の文字を、そのままに表記した。」

※なお、私の手元にあるベートーヴェンの第2交響曲のスコアには、メトロノームの表示がない。ベートーヴェンの付けたメトロノームの数字を書いておく。

第一楽章　Adagio molto　♪ = 84

Allegro con brio　𝅗𝅥 = 100

第二楽章　Larghetto　♪ = 92（これは 84 がよい）

第三楽章　Scherzo Allegro　𝅗𝅥. = 100（むしろ 108 がよい）

第四楽章　Allegro molto　𝅗𝅥 = 152

（　）内の表示は私の演奏したテンポである。

Bowing の実際

A　ベートーヴェン作曲　第2交響曲　D major Op.36

1、ベートーヴェンの交響曲作品の印刷が、どのようにして行われてきたのかについて、私はほとんど知らない。とにかく、私の手元には印刷されたスコアがある。これには、昭和 28 年 8 月 30 日再販発行と書かれている。

2、ベートーヴェンの当時は、最初にパート譜が印刷されたという。そのあとはどうなったのか？大分遅れてスコアは印刷されたようである。当時、使われたパート譜には、いろいろな書き込みがあっただろう。これらはスコアの印刷にどのように影響しているのだろう。スラー、スタッカートの記号などは作曲家の考えたものと同じなのかどうか？

当時は、スタッカートなどは弓を弦からはなさないで、しっかりと弾いていたように思う。曲名は忘れたが、かつてゲバントハウス管弦楽団の演奏を見たことがある。スタッカートでベートーヴェンを演奏していた。

3、今日の演奏は、20 世紀の後半からはいろいろな演奏法が行われ、弦の場合はもっぱら弓を弦に打ちつける spiccato の奏法が多くなった。バイオリン・ソナタなどもほとんど spiccato の奏法が主となっている。たしかに、この方が音の歯切れがよくて耳に心地よい。ベートーヴェンの交響曲の「緩徐楽章」は普通の Bowing でよいが、スケルツォは spiccato で当時からやっていたであろう。とにかく、リズムの表現については弦の演奏者は皆、関心を持つべきである。

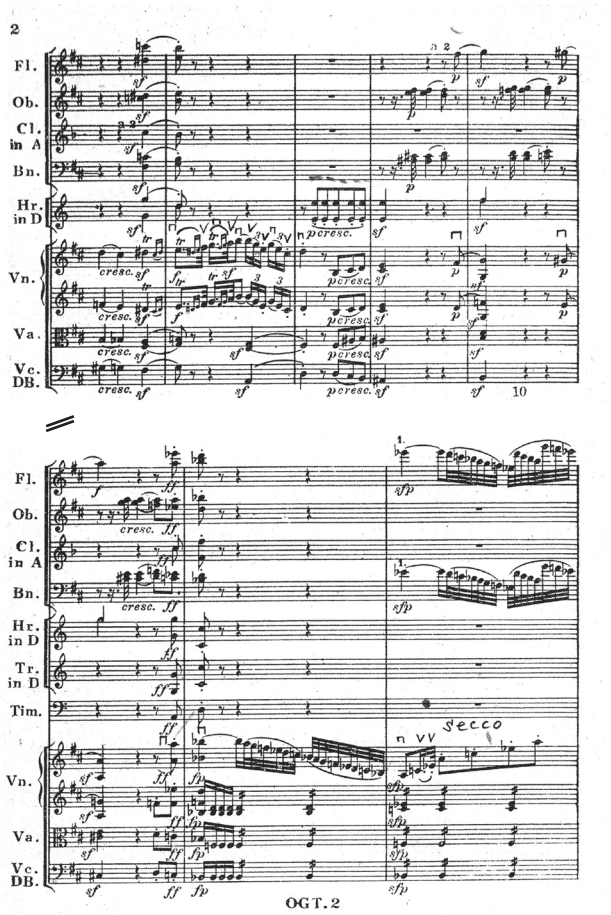
4、ベートーヴェンの作品については初版から今日まで、少しも変更がないのかどうか？私は、ただ、今日風にベートーヴェンの作品をどうやったらちゃんとしたものになるのかを演奏のたびに考えるだけである。

5、なお、管楽器については、staccato と staccatissimo といった tonguing が確実に出来る奏者がいればオーケストラは成立する . 舌の「突き方」の短い表現は常に必要である。

譜例集はページで示してある。

Ⅰ（第一楽章）

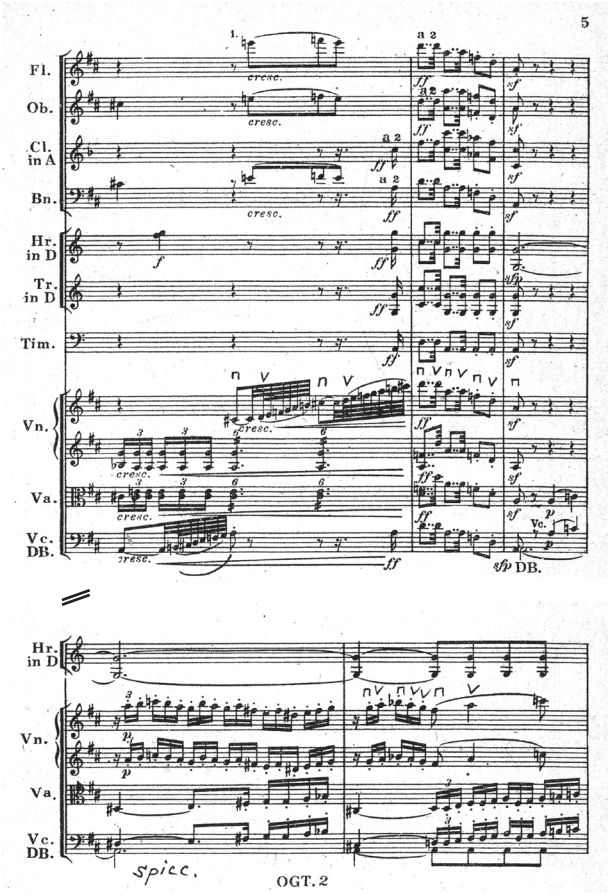
2 page



tr. の部分の書き方が独特で、演奏法がよく分からないのだが、1mo Violino に付けたスラーでやることしかないように思う。あるいは後打音を付けないか。32 分音符はいずれにしても∨の弓で演奏できる。むしろ、この方が効果的だろう。

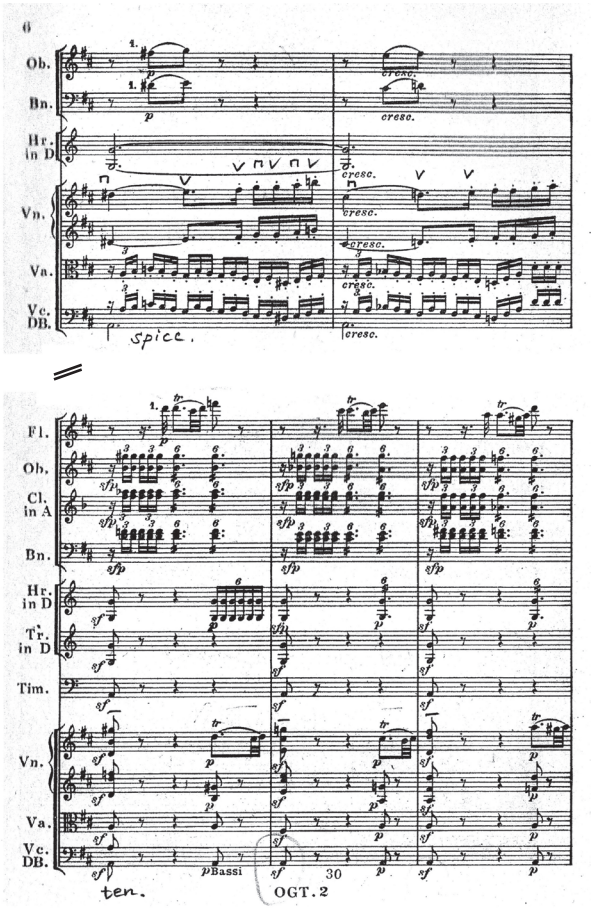
下の段の si♭の音符は ***f*** で演奏した後は上の音のみでよろしい。下の方の ***p*** の音はぼかしておくのがよい。

5 page



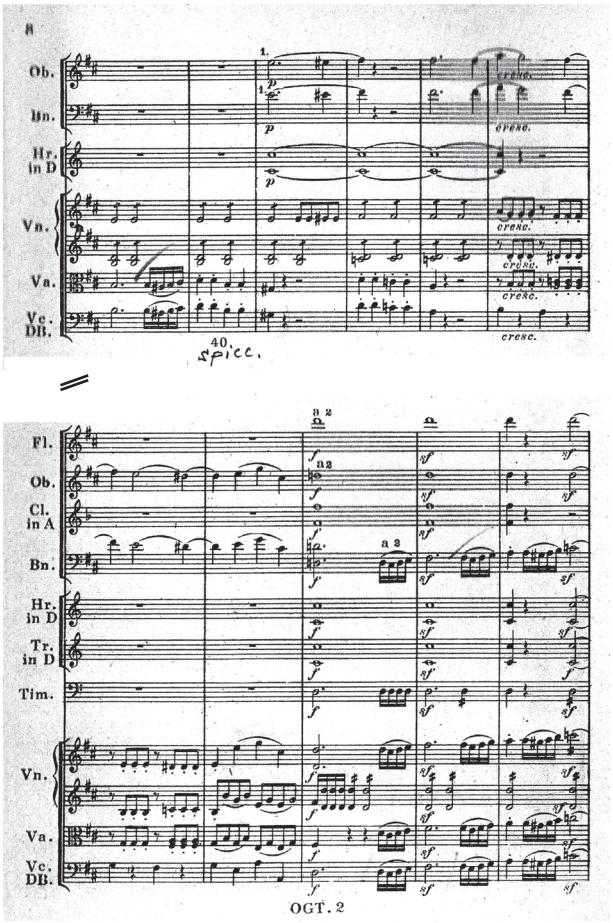
unis. の ***ff*** の部分は⊓∨でリズムを明快に合わせること。下の段の Violino は spiccato で軽くとばして弾く。viola、cello も同じ演奏法を行えばよい。

6 page



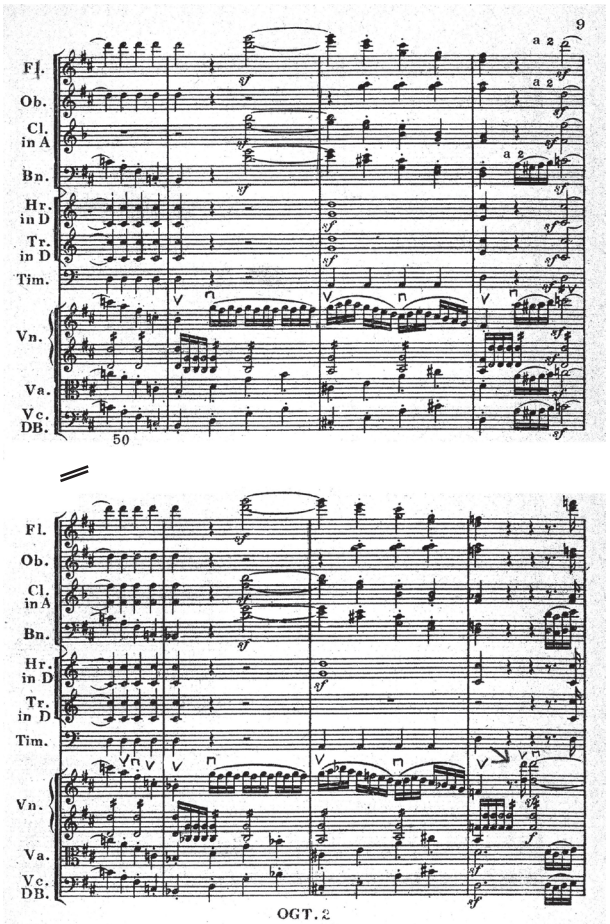
下段の木管群は当然短い舌突きで演奏する。弦楽器の和音は多少長目に弾いて、よく響かせる。

8 page



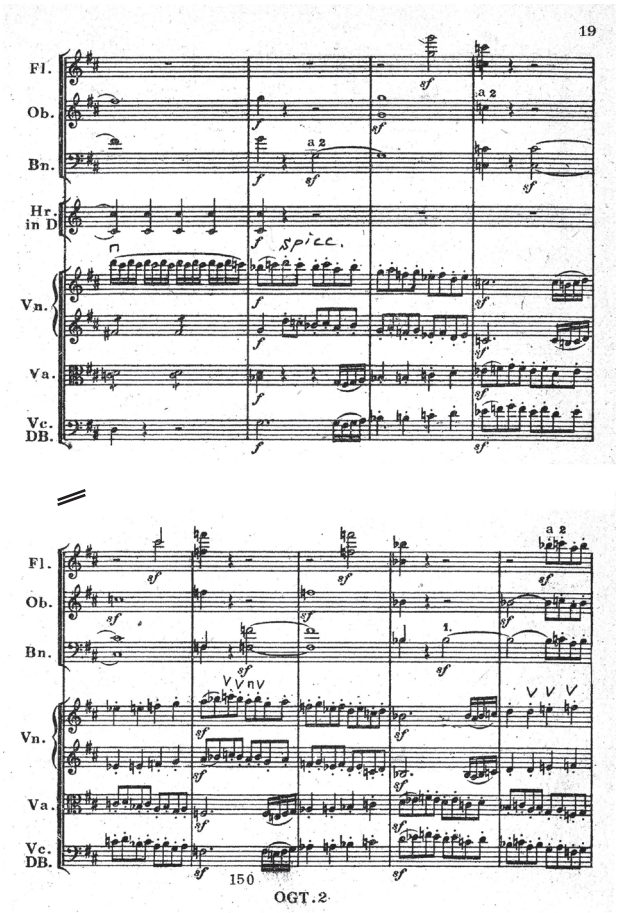
ホルン、トランペットの全音符は1mo Violinoの響きを消さないこと。

9 page



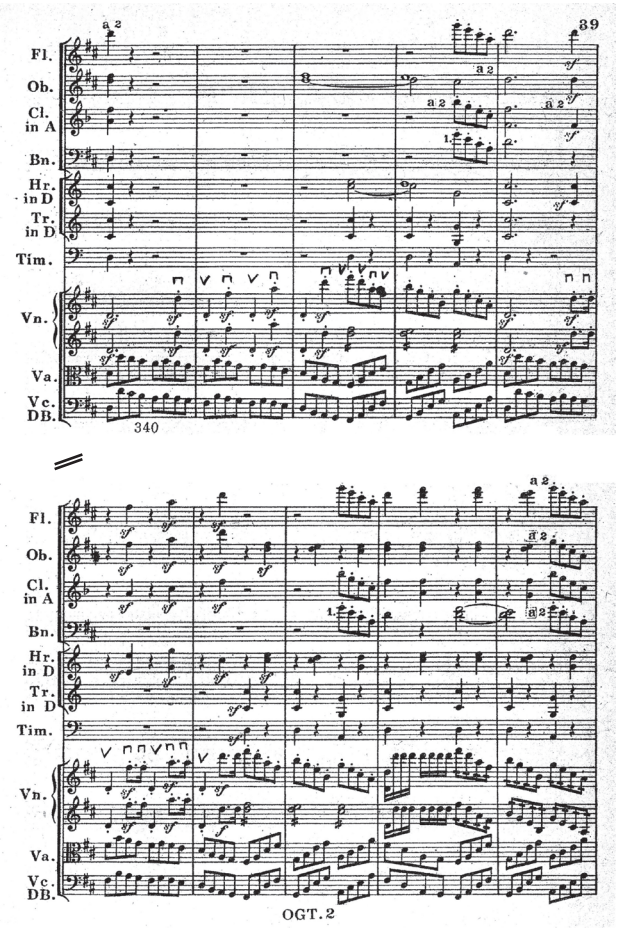
2小節目は、このBowingが効果的である。逆弓ということでの演奏である。

19 page



最後の小節は、出来るだけ短い表現で行う。∨の運弓の連続がよろしい。

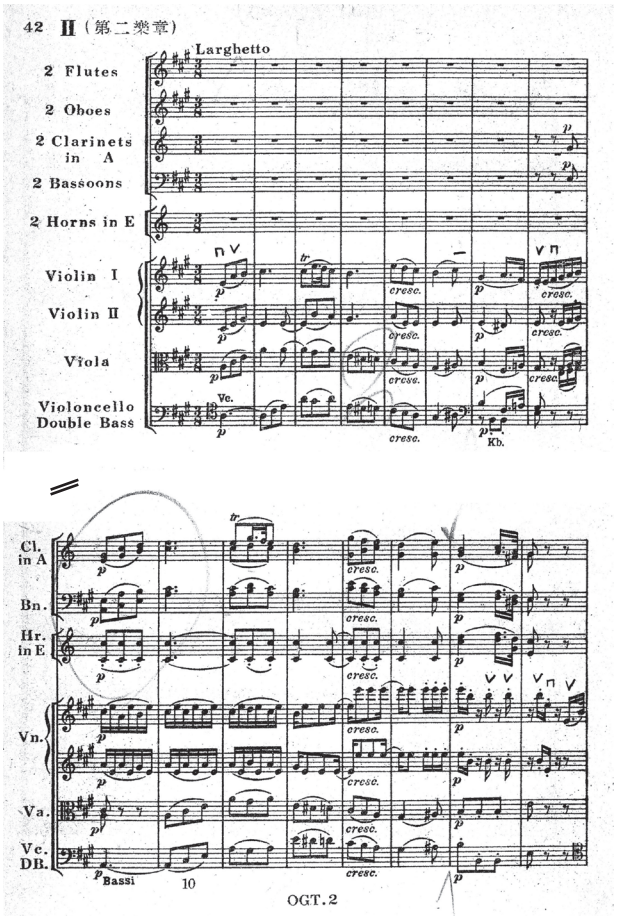
39 page



上段の部分は ***sf*** を強調する為の Bowing である。⊓、⊓というようにして次の小節を∨⊓∨⊓とすることで ***sf*** は自然に演奏出来る。

Ⅱ（第二楽章）

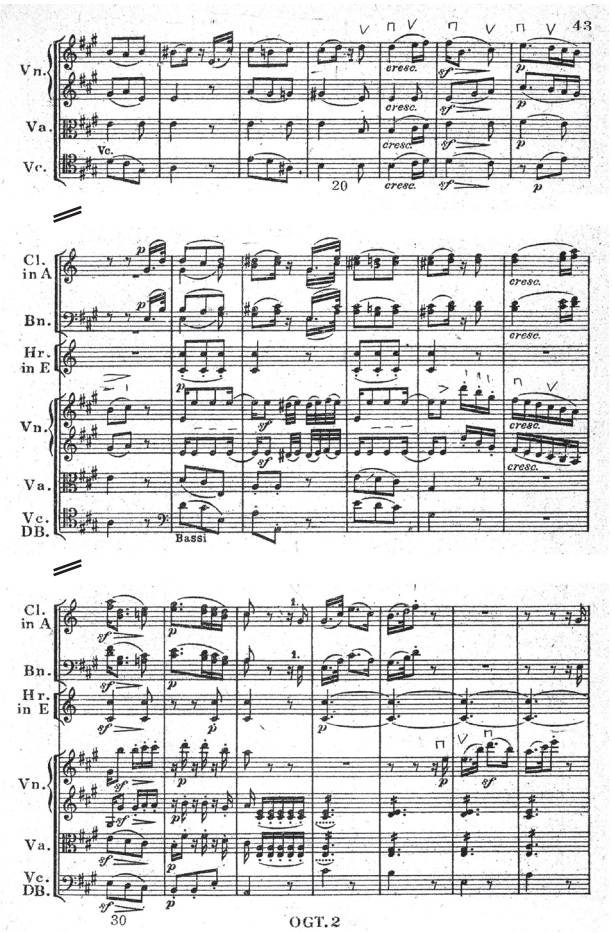
42 page



楽章全体のテンポは速目がよい。とにかく長々とした楽章で、遅い速度では演奏者も、聴集もあきてしまうだろう。

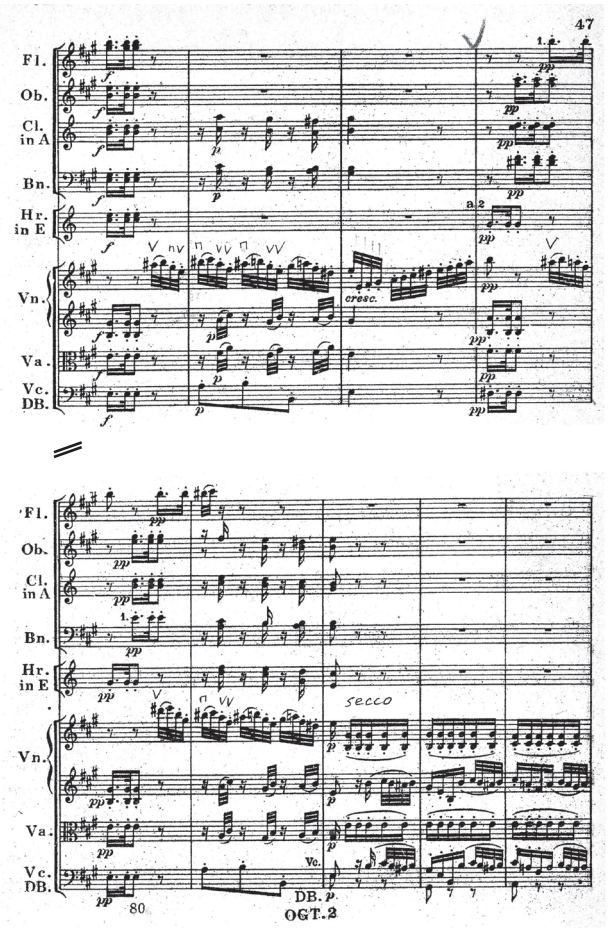
冒頭部６小節目の終りのあとに、subito ***p*** が来る為の Bowing であり、これがやりやすい。

43 page



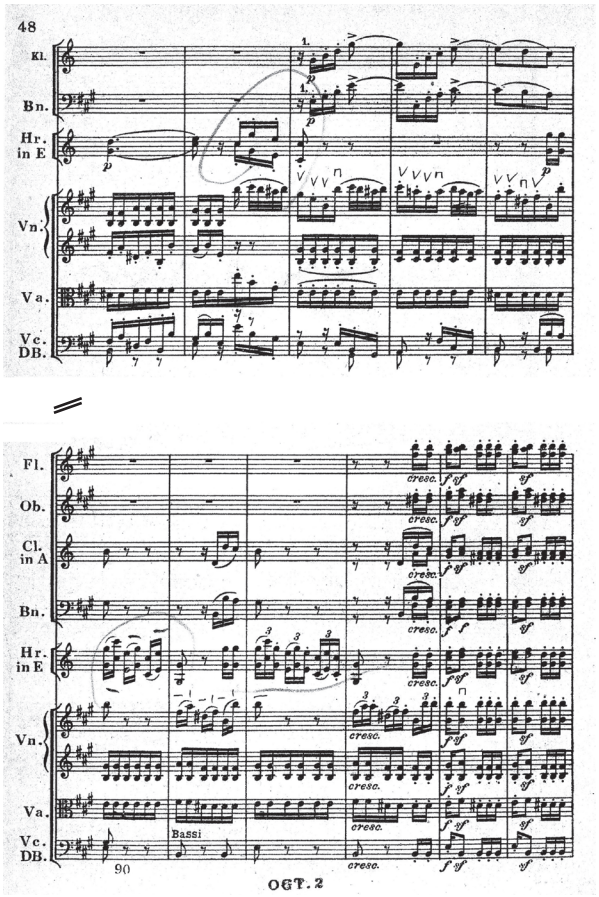
スラーを短くして音を豊かに出すことが出来る。シンコペーションの伴奏部は一種のメロディーとして扱い、テヌート（音を少し長目に弾く）でしっかりと演奏する。

47 page



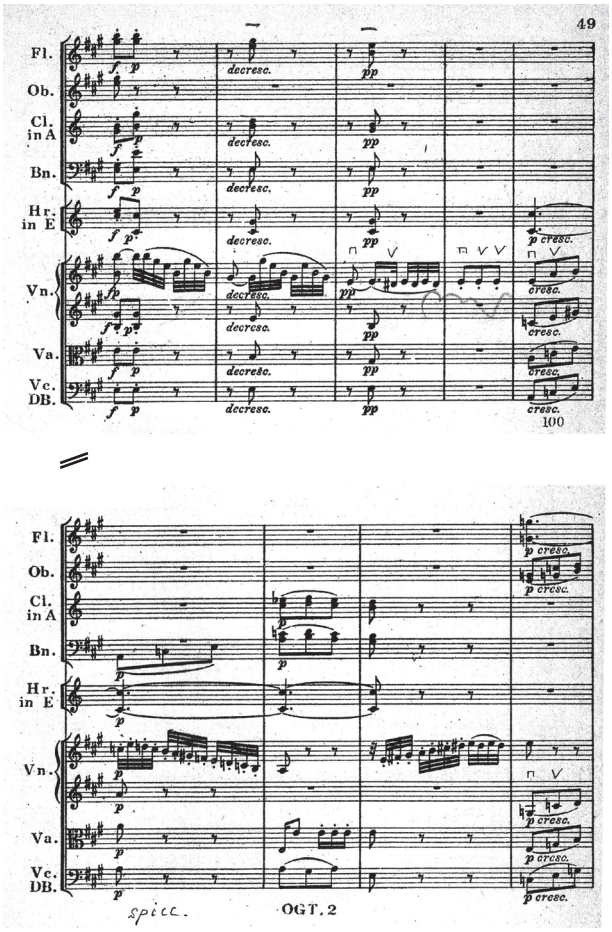
下段の 1mo Violino の伴奏型は、短く弓をとばして演奏するのがよい。

48 page



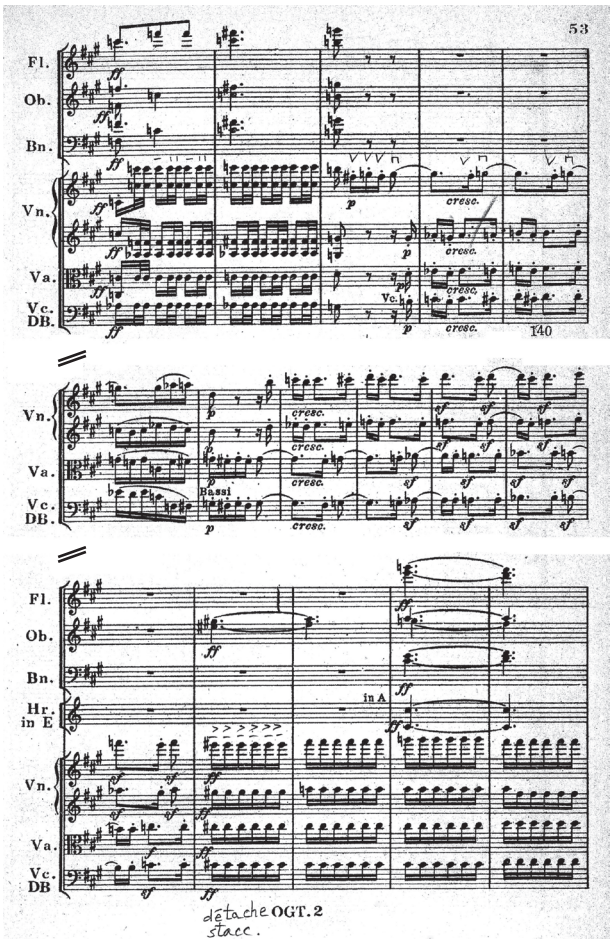
下段の 1mo Violino の演奏は、はじめを長く、後の方を短く演奏する。これは、18 世紀からのヨーロッパでのこの音型の演奏法で、モーツァルトの父親が、自分のバイオリン教本の中で、この手の演奏法について説明している。当然、ホルンの音型も同じ演奏法をとる。

49 page



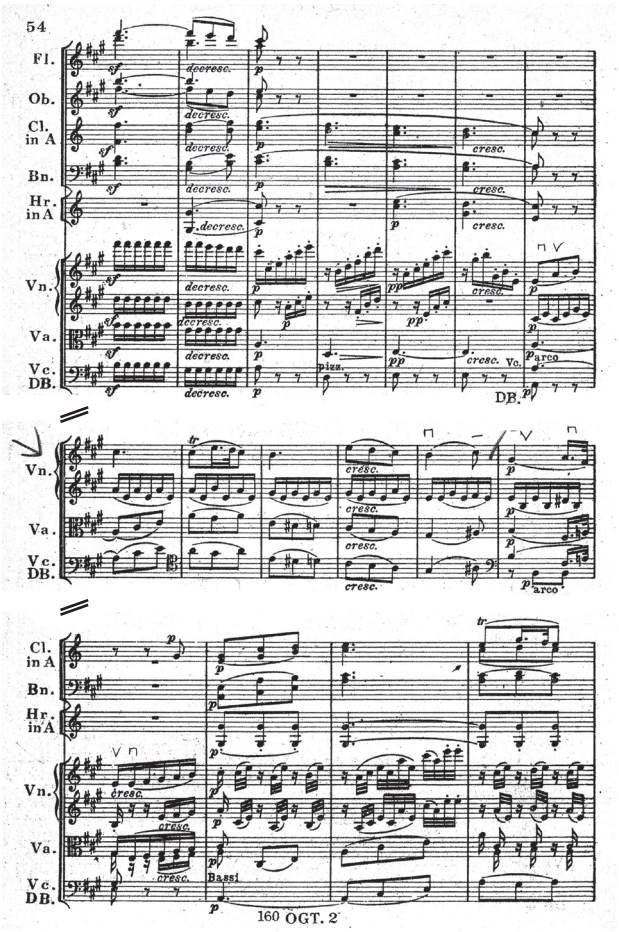
3小節目は⊓、∨の形をとる。8分音符は⊓∨∨と少し短めに演奏するのがよい。当然、***pp*** で弱奏である。下段の 2do Violino は、*cresc.* の為に⊓∨で演奏するのがよい。

53 page



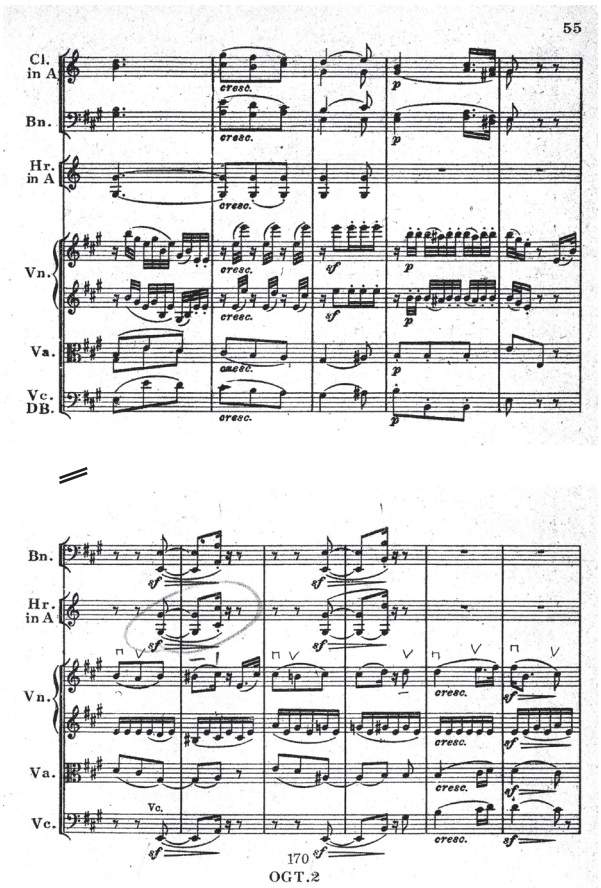
ff の弦楽部は détaché がよい。十分に鳴らすこと。ここではホルンも十分にその音色を響かせること。

54 page



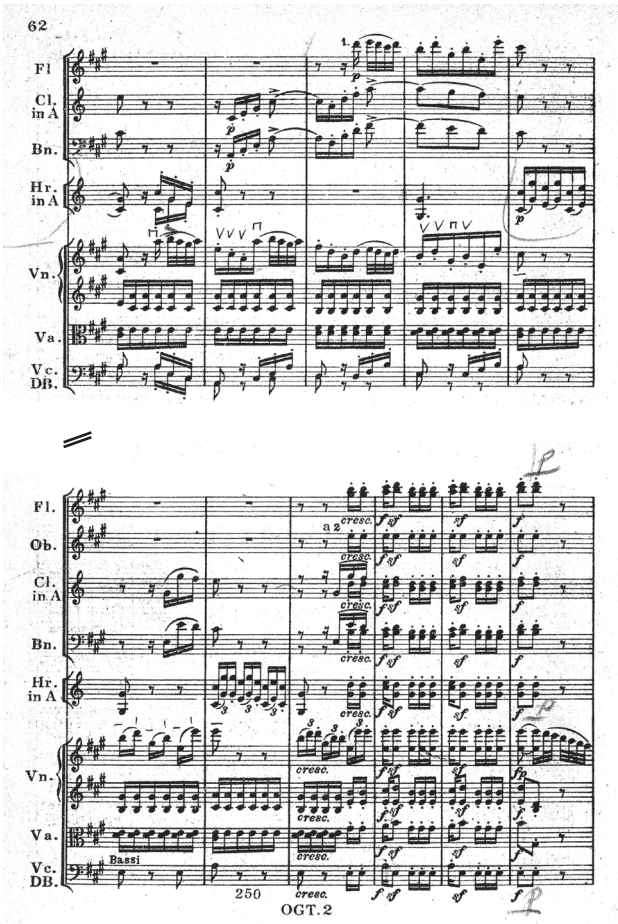
上段部の *decrese.* の Violino の演奏表現はなかなかむずかしいだろう。歌になりにくいのである。弓は弦においたままの形をとる。次から spiccato の演奏となる。

55 page



下段 1mo Violino のスラーは⊓∨というようにして、鳴りを重視する。概ね、スラーは切って演奏するが、当然、レガートをわすれてはならない。

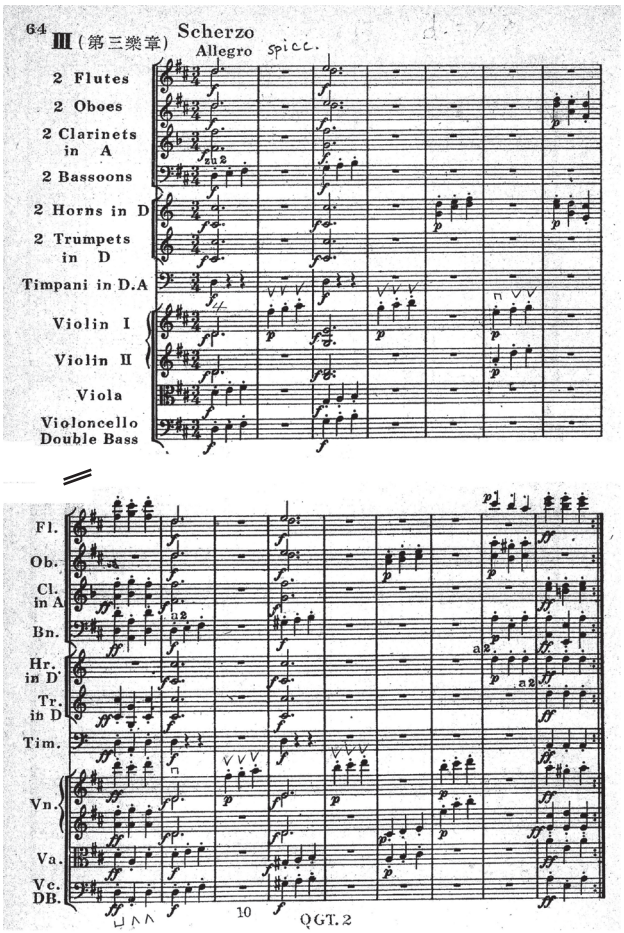
62 page



１小節目の旋律の入りを十分に歌うこと。

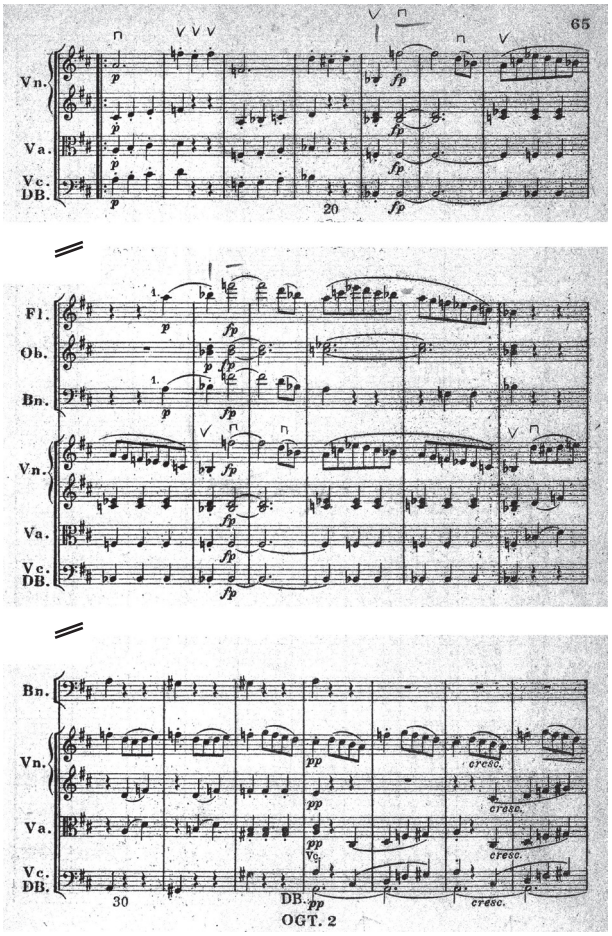
Ⅲ（第三楽章）

64 page



概ね、spiccato の演奏法によってどの弦楽器もこのスケルツォを表現する。1mo Violino の冒頭部は 1st position がよい。***ff*** の部分は弦楽器全てが⊓∨∨でよく鳴らす。

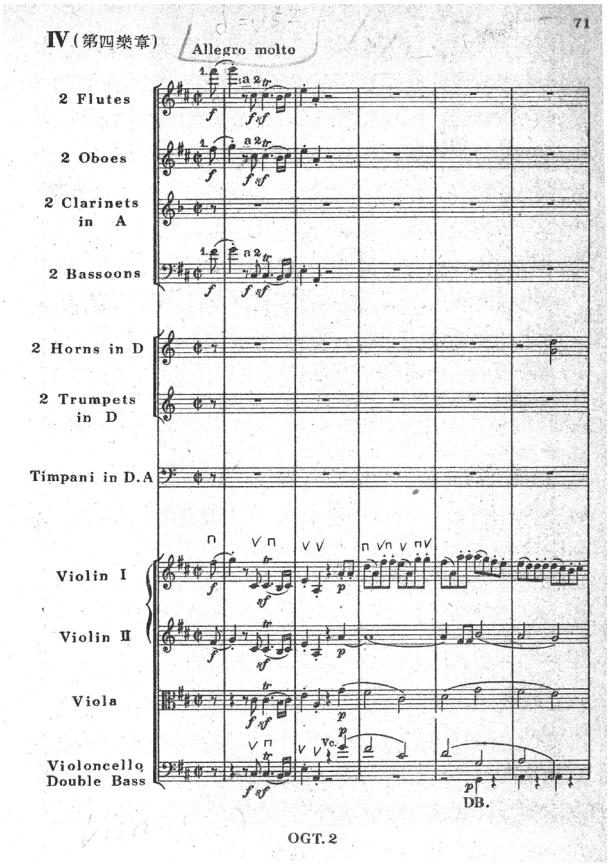
65 page



5小節目は、このBowingが弾き易いだろう。6小節目は𝅗𝅥音符と𝅘𝅥𝅮との間を少しあけてもよいが、あけているひまなどはないかも知れない。スラーでそのまま弾いてもよい。

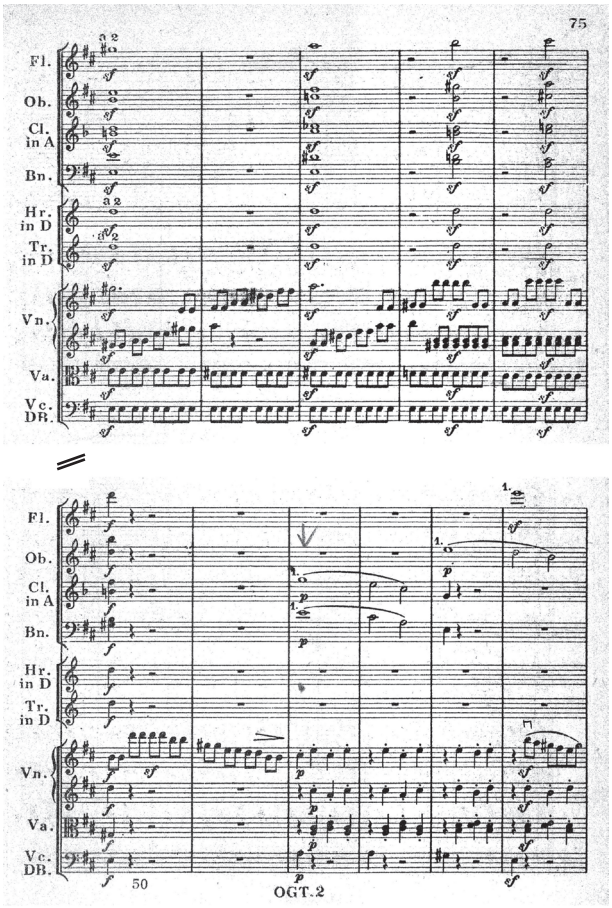
Ⅳ（第四楽章）

71 page



⊓で出発するが、不完全小節をのぞいて3小節目からは、混合弓とする。この部分は、すこぶるむずかしいだろうがこれより方法がない。

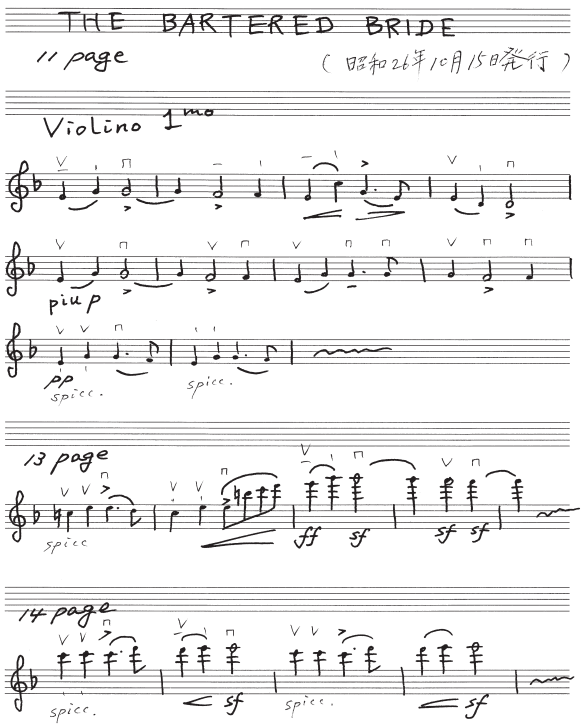
75page



下段の２小節目のおわりを少し＞の記号で音を小さくした方が、次の***p***にうまくつながるだろう。ベートーヴェンが、そのようにすることを忘れたのではないか？ subito ***p***ということはおかしいだろう。

譜例は、例示した以外にも重要な部分があるが、原稿のページ数に限りがあり、割愛せざるを得なかった。

B　スメタナ作曲　歌劇「売られた花嫁」序曲



テンポ Vivacissimo

これだけの速い管弦楽曲は、それ以前にはないだろう。モティーフが非常に明快で、この３つの譜例があれば弦楽器群全体の Bowing もきまり、このことについては意外に解決が早いだろう。概ね、とばし弓で演奏することになる。

あとがき

1、プロのオーケストラとアマのそれとの違いはうまい、へたということではなく、成立目的がまったく異なるのである。

プロの場合は、仕事として演奏をやり、概ね、指揮者に従ってことを起こす。もちろん、一人一人は自分の作り出す音楽も大切にする。単位あたりの時間で音楽を売るのである。演奏自体が破たんすることがあってはならない。Bowingなどは、ほとんどパートのトップが適当に付けて行けばよい。

2、アマの場合は、メンバー 一人一人が自分の楽しみの為に , ということでオーケストラは成立している。演奏会も持つのだが、当然練習も行う。これか一つの楽しみなのである。しかし、作品をちゃんとしたものにする為に、奉仕の精神はしっかりと一人一人が持たねばならない。結局、一人一人がきびしい訓練に耐えられなければよい演奏は出来ないし、又、楽しみも得ることは出来ないのである。

3、基本的なことをいえば、弦楽器は弓の毛と弦のマサツで一音が出来上がる。この音が歌になっていなければならない。その上で、Bowing は常に考えられていなければならない。プロもアマも、このことは同じなのである。

4、チェロの場合は、バイオリンより弓の長さが短かい。***pp*** で unis. の演奏があり、その中で少し *cresc.* をするといった場合には、バイオリンとは違った Bowing もあってよい。その場合には、チェロの鳴りを良くする為にスラーを短かく切って演奏することになる。

5、弓というものは、ただ、上げたり下げたりということでよいものではない。毛の使い方、右手の力の入れ方、スピードなど、音の表現の為に、いろいろと使いわけが出来なければならないのである。

例えば、混合弓(mixed Bowing)というのがあってスラーでない部分での圧力のかけ方も曲によって、強弱によっていろいろと違わせる必要がある場合もある。これなどは、結構むずかしい奏法であろう。

6、とにかく、オーケストラの最初の練習開始迄には Bowing は一応きまっていることが望ましい。各パートのトップが集まって楽譜を十分に検討して弓付けを行うことがとりあえずよい。あとは、練習をやりながら手直しをして行けばよいのである。コンダクターが Bowing を直接指示して行くこともあるだろう。弦群の鳴り方は、すべてこの Bowing にかかっている。これによってよいオーケストラ、わるいオーケストラといったふり分けが出来るだろう。Bowing についてはオーケストラにかかわる全員が認識すべきなのである。当然、ピッチ、リズムがきちんと表現されたものでなければならないことはいうまでもない。

2009 年 1 月 12 日（月）

於いて　北ノ沢